



上ノ入り口には、マツケリとラエスのアセテート素材がズラリ。べっ甲時代のデザインや風合いが、アセテートにも活かされている点がこのファクトリーの魅力だ。右ノ2階が組立&検品スペース、1階がパーツの成型&加工スペース。下ノ旋盤のプログラムなど最新鋭工作機械の扱いは息子レオ氏の守備範囲。メタルバーの注入や成型した部品の研磨もすべて自社内で行う。



ポストンやウェリントンなど、クラシックな定番セルフレームを得意とするカドール。写真のような、折りたたみ式のリーディンググラスなども、いまだ製造を続けている。



ファクトリーで仕上げたフレームは、すべて自分で検品調整するというアントーニオ氏。



カドール  
**Kador**



社長 アントーニオ・フレスクラ氏  
左から奥様で会計担当のアルベルタさん、息子のレオ氏、そして当主アントーニオ氏。ペルーノ地方でも今や珍しい、後継者問題も免注の大幅減にも無縁な、職人を中心とする家族経営のファクトリーだ。

## べっ甲時代からのノウハウが 生きるぬくもり系アセテート

家族経営のファクトリーが生み出すクラシコ・イタリア

1962年の創業以来、毎日12時間、今でも働いているというアントーニオ・フレスクラ氏。

「仕事のない時は山登りして写真を撮るのが趣味」という氏は、今では世界的にも希なべっ甲素材の眼鏡を作れる数少ない職人であり、べっ甲素材の貴重なストックを持っている。

「日本の眼鏡屋さんの100周年に頼まれて200本作ったこともあるよ」ちなみに後に紹介する博物館の展示の一部で、べっ甲フレーム製作の実演ムービーに出演しているのも、彼だ。

「近頃はクラシックなデザインがひと回りして傾向として戻ってきたから、ウチは60年代の型をまた引っ張り出してアレンジして使っていたりする

んだよ。ぼくはもう78歳で、人生もあとちょっとなのが残念だなあ(笑)」

と、なぜか陽気に語るイタリア男が手塩にかけた工場は、

今やこの地方でも少ない昔ながらの家族経営。べっ甲を温めるガスコンロから最新の自動旋盤、アセテートの在庫まで小さいながら充実した内容と品質を誇っている。

「小さい工場だから不景気が辛いんじゃない、大手下請けだけやっているから切られた時に困っちゃうんだよ。カドールはずっとカドールだったから、ここまでやってこられたのさ」

飾らないが端正でクラシック。良質のイタリアらしさ満点の眼鏡には、当主の手柄が出ているようだ。



古い眼鏡を自分の作品とともに集めたスペースも。アセテートの時代になってもべっ甲は特別な存在としてノウハウごと保存している。

